

平成 17 年度 修士課程学位論文要旨

学位論文題名

非構成的評価法の確実性に影響する条件とは何か

学位の種類： 修士（作業療法 学）

保健科学研究科 作業療法学 専攻 学籍番号 045302

氏名：京極 真

（指導教員名：山田 孝 教授）

注：1,000 字程度（欧文の場合 300 ワード程度）で、本様式 1 枚（A 4 版）に収めること

【目的】 クリニカルリーズニングの推論構造を検討し、非構成的評価法(UA)の確実性が成立する条件を明らかにすることである。

【方法】 2段階からなるデルファイ法を実施した。第1段階では、文章で研究協力に同意した作業療法士(OTR)19名を対象に、UAの結果を収集し、それをもとに項目リストを作成した。第2段階では、文章で研究協力に同意した経験年数10年以上(熟練群)19名と3年以下(新人群)16名を対象に、第1段階で得られた項目リストを送付し、評定後、研究者に返送してもらうという手続きを3回行った。評定は3点法で行い、1つの評点に70%以上が集まれば収斂したと見なした。また、共通する評定毎に分類し、研究目的と照らし合わせ、評定理由が凝縮されているとみなせる記述を典型例として提示した。

【結果】 第1段階の有効回答は19名中18名で、31の項目が得られた。第2段階の有効回答は、熟練群17名、新人群10名だった。両群共に収斂した項目は「同意できる」は3項目、「同意できない」は2項目だった。熟練群のみ「同意できる」に収斂したものは1項目だった。新人群のみ収斂した項目は「同意できる」は6項目、「判断に迷う」は7項目、「同意できない」は1項目だった。両群共に収斂しなかったものは11項目だった。典型的な評定理由は、両群共に「同意できる」は【ナラティブの変化とパフォーマンスの変化が伴っている】、両群共に「同意できない」は【判断できる根拠は見あたらない】だった。熟練群のみ「同意できる」は、【熟練群では関係が取れてなければ言わない】、新人群では【打ち明けた内容がプログラムでできることに限られる】だった。新人群のみ「同意できる」は、熟練群では【結論で使っている概念が曖昧である】、新人群では【語りからは自分の状況を感じ始めたのだと考えられる】だった。新人群のみ「判断に迷う」は、熟練群では【情報不足で判断できない】、新人群では【偶発的であるように感じる】だった。新人群のみ「同意できない」は、熟練群では【自宅内で何が行えるのかわからない】、新人群では【家屋をみないと判断できない】だった。両群共に一致しないは、熟練群では【なんともいえない】、新人群では【判断が早計である】だった。

【考察】 経験年数に関係なく同意される条件は、推論的内容的には実際の作業遂行によってクライアント(CI)の語りが増え、CIの作業有能性の変化を評価していること、論理的には推論の過程の省略が少なく、暗黙の前提が共有しやすいことであった。逆に、経験年数に関係なく同意されない条件は、推論的内容的には明らかな論理的飛躍があること、論理的には暗黙の前提を共有できないことであった。これら条件を一般化すると、推論に用いられた暗黙の前提と推論過程の省略性が評定に大きく影響を与えていた。UAは暗黙の前提と省略性とは切り離せないが、経験年数に関係なく同意される条件を満たすことで、確実性は向上すると思われる。